

令和元年度 大田区立新井第四小学校 自己評価 報告書

○ 本校の概要

- 本校は、「じぶん」についていいな「ともだち」についていいな「がいばい」の学校」をめざし、児童の自尊感情の醸成をすべての教育活動の基礎として、すべての教職員がすべての児童を育てる教育実践をしております。
- 本校は、子供たち一人ひとりに学校生活の「今」を充実した楽しいものにしてほしいと願うとともに、子どもたちが「未来」をたくましく生き抜く力(主体性や共感性、レジリエンスなど)を培いたいと考えています。
- 今年度の重点課題を「学びに向かう力(学習規律の確立、学習意欲や主体的な探求心)」の醸成とし、保護者、地域の協力を得、学校組織全体でその実現に取り組んでいます。

○ 自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標	成果評価	これまでの取組今後の改善策	学校関係者記入欄 コメント
プラン1 未来社会を創造的に生きる	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これからの社会の変化にしっかりと対応する子どもの力と自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外国の方々とのコミュニケーション能力の育成等を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	4:80%以上の児童が学校評価「自分に関すること」「人とかかわりに関すること」で肯定的な評価をする。	4	①担任とALTが、授業のねらい、展開、役割分担等について、しっかりとコミュニケーションを図り、効果的な学習を展開した。その結果、児童の行動観察並びにワークシート・成果物等から、児童の学習意欲の高まり、コミュニケーションの素地等の資質・能力の定着が、一層図られたことが認められた。 ②ICTサポート等によるICT機器の実践的な活用研修を行ったため、教師用タブレット、児童用タブレット共に活用頻度が向上した。その結果、児童の学習意欲が向上し、効果的な視覚的情報の活用により学習理解の伸長が見られた。	・外国語、ICTなど家庭環境(経済力等)で習得に差が出てしまうものについては、学校教育の中で、引き続きしっかりと学習機会を確保していただきたい。 ・児童アンケートによると「友達を傷つける言葉を使ったことがある」と自覚する児童が2割弱あります。そのような自覚ができてきたことからさらに他者を尊重する心を育てていただきたい。
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ICT機器を活用した授業を実施する。	4:設置教室を使用する全正規教員が週1回以上活用した。 3:80%以上の正規教員が週1回以上活用した。 2:60%以上の正規教員が週1回以上活用した。 1:60%未満であった。	4	3:70%以上の児童が学校評価「自分に関すること」「人とかかわりに関すること」で肯定的な評価をする。	4	③本校の「1校1取組」である長編の実践は、教職員の意識(取組の意義理解、跳ばせ方等)取組方法の理解、児童の能力への理解)の変化により、児童の意識も変容し、昨年度に比して、飛躍的な記録の向上が見られた。また、記録・体力の向上のみならず、思いやりや責任感を育む、社会情動的能力の伸長も全学年で見られた。	・全学年のSSTの取組は、共生や協力が求められるこれから社会を生きる子どもたちにとって重要なものを学校の取組を評価する。
		体力テストの結果を踏まえ体力向上全体計画を作成し、計画に基づいた体育指導や「一校一取組(運動)」「一学級一実践」運動を実施する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	2:60%以上の児童が学校評価「自分に関すること」「人とかかわりに関すること」で肯定的な評価をする。	4	④全学年年間8回以上のSSTの取組、年2回の道徳性アセスメントとそのフィードバックは、学校評価(教職員自己点検評価)においても、児童のソーシャルスキルの伸長や自尊感情の醸成、他者との協働性において有効であるとの評価が出た。また、全国学力調査質問紙並びに学校評価(全学年児童アンケート)の「自分には良いところがある」への回答も取組目標の「4」を超える結果となった。また、1年各学級と6年各学級、2年各学級と5年各学級を入れ子に配置した校内教室配置は、日常的に高学年の高学年としての自覚と低学年の高学年への憧れの心情を育み、児童の心の成長に有効であった。	・「未来社会を創造的に生きる子どもの育成」の取組内容(大田区共通内容)が、目標の割には、浅薄な印象を受ける。
		SSTワーク、道徳性アセスメントなどを活用し、全教育活動を通して、児童が発達段階に応じた自己表現力や他者理解力を培う。	4:学校評価で80%以上の児童が肯定的に評価する。 3:学校評価で70%以上の児童が肯定的に評価する。 2:学校評価で60%以上の児童が肯定的に評価する。 1:学校評価で60%未満の児童が肯定的に評価する。	4	1:60%未満の児童が学校評価「自分に関すること」「人とかかわりに関すること」で肯定的な評価をする。	4		
プラン2 学力の向上	児童・生徒一人ひとりの学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習カルテを基に児童・生徒と面談し、一人ひとりの学習のつまずきや学習方法について、指導する。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4	4:80%以上の児童が毎学期の期末テストにおいて、70%以上の習得率を示す。	4		・とてもよい結果だと思います。今後とも引き続きご指導をお願いしたい。
		算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:学期に2〜3回知らせた。 3:学期毎に知らせた。 2:年度間に1回は知らせた。 1:お知らせできなかった。	4	3:70%以上の児童が毎学期の期末テストにおいて、70%以上の習得率を示す。	4	①毎学期、学習カルテを基に、まず、児童に自らの学習状況を振り返らせた。さらに教師から学習の成果と課題、よりよい学習のための方略、学習規律等について、指導助言を行った。また、学習カルテは、通知表と共にフィードバックし、保護者の確認を得、保護者から児童への指導助言を行い、その内容を記入してもらった。	・学力定着・向上は、学校の最も基本的なことであるので、可能な限り、一人ひとりの状況に合わせて、引き続きご指導いただきたい。
		学習指導講師等による算数・数学・英語の補習を実施する。	4:対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 3:80%以上の教員が働きかけた。 2:60%以上の教員が働きかけた。 1:60%以下の教員が働きかけた。	4	2:60%以上の児童が毎学期の期末テストにおいて、70%以上の習得率を示す。	4	②算数科の到達度をステップ学習シート並びに東京ベネッセドリル診断シートを活用し児童が自らのつまずきに気づくとともに保護者に通知した。 ③学年との連携の下、算数少人数講師、学習指導講師による習熟度別少人数指導、各学年週1回の放課後補習指導、年7回の土曜補習を行い、個に応じた学習指導、学習支援を行い、一人一人の確かな学力の育成に努めることができた。	・特に算数は、分かった時の楽しさや面白さを、今後現場の先生方にはその子の目線で教えてほしいです。
		授業改善推進プランを、授業に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	1:60%未満の児童が毎学期の期末テストにおいて、70%以上の習得率を示す。	4	④授業改善推進プランの中心となる基礎基本の定着については、日々の学習指導はもとより、本校独自の「期末テスト」等においてその定着を見られた。また、主体的・対話的な学びについては、ラーニングピラミッドの理論を重視し、友達に説明する(教える)学習活動を積極的に取り入れた。 ⑤年6回の東京ベネッセドリル診断シートの実施で、児童個々の理解状況をより細やかに把握し、学習内容の定着を促進した。その結果、成果指標「4」が実現できた。	・ここ2年の学力の向上は、高く評価できる。本来、入四の子どもたちがつもっている素直な学ぶ意欲に火をつけ、着実な力とする学校の指導に感謝します。 ・土曜「がんばる教室」(土曜補習教室)の地域と連携した取り組みが、「自分もがんばれば勉強できる」という気持ちを持っていて感じます。
プラン3 豊かな心の育成	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、未来への希望に満ちた豊かな心をはぐくみます。	小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	4:80%以上の児童が学校評価で「自分は学習のルールを守っている」と肯定的に回答した。	4	①中学校区で学習規律・生活スタンダードをテーマとし、各校の取組状況を共有し、指導法の共通理解が進んだ。	・児童アンケートの「自分のこと」の結果で、数値の高さ、前年度からの改善とも、概ね良い結果が出ていることを評価したい。引き続き、こころの成長を応援していただきたい。
		道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	4:学期に2〜3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	3	3:70%以上の児童が学校評価で「自分は学習のルールを守っている」と肯定的に回答した。	4	②完全小学校道徳教育研究会会長を招き、道徳授業について指導助言を得た。また、「道徳性アセスメント」を年2回行い、アセスメント結果について、児童・保護者にフィードバックした。	・月1回の民生児童委員・主任児童委員との支援会議では、子どもたちの様子や学校の状況などを率直に情報共有していただき、地域と共に子どもを支えようとする学校の意識を強く感じます。
		学校生活調査(メンタルヘルステック)の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	2:60%以上の児童が学校評価で「自分は学習のルールを守っている」と肯定的に回答した。	4	③学校生活調査結果はもとより、日々、児童の心情に寄り添い、その気付きを日常的な報告・連絡・相談で共有し、管理職のリーダーシップのもと、必要な具体的支援を機を逃さず行った。	・管理職以下、先生たちが一丸となって、それぞれの子どもたちに愛情をもってかかわっていることを感じます。
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	1:60%未満の児童が学校評価で「自分は学習のルールを守っている」と肯定的に回答した。	4	④管理職、並びに校内委員会を中心と早期、いじめに対する教職員の共通理解を常に図り、いじめが生まれない学校風土の醸成と早期対応に努めた。 ⑤校内ケース会議(毎月1回以上)、主任児童委員、民生・児童委員との児童理解連絡会(毎月1回以上)において、情報共有を図り、具体的な対応についての意思決定や役割分担を行い、児童並びに保護者を支援した。 ⑥昨年度より取り組んでいる学習規律「10の約束」について、毎週末、児童自身による振り返りを行った結果、さらなる定着が見られた。また、児童の心情に寄り添い、「3回ルール」等により、児童自身が自らの行動を振り返り、よりよい行動の具体的な在り方や仕方に気づく学びができた。	
プラン4 体力の向上と健康の増進	スポーツに親しむ心の育成や、運動習慣の定着による体力の向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	4:80%以上の児童が学校評価で「めめてを頑張って運動した」と肯定的に回答した。	4	①学校評価(保護者アンケート・児童アンケート)により、保護者・児童に対して、望ましい生活習慣が、学力向上よりよい学校生活に結びつくことを啓発した。アンケート結果では、80%以上の児童が規則正しい生活に留意していることを啓発した。	・2月に予定されていたマラソン大会については、学習効果等の観点を実施を見送ったこと自体は理解できる。ただ、前年度の記憶から、ボランティアの準備をしていただき保護者や地域の皆さんもいらしたと思うので、もっと早くにお知らせがよかった。
		給食指導及び教科等における指導を通して、食生活の充実・改善をねらった「食育」を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	3:70%以上の児童が学校評価で「めめてを頑張って運動した」と肯定的に回答した。	4	②栄養士が、日々の給食の栄養価や栄養バランス、季節感や年中行事との関連、食の文化的な背景等を小文にまとめた、給食委員児童が、給食時間に全校放送でアナウンスした。また、職員室前に給食にちなんだ参考図書や実物の食材や調理器具等を展示した。その結果、児童の食に関する興味や関心の減少が認められた。また、全校統一の配膳方法、落ち着いて食マナーと感謝の心を培う「もぐもぐタイム」の定着もその要因として認められる。2月の入四マラソン記録会に向けて、朝の始業前の時間に入四マラソントイムを設けて体力づくりを継続的に進めている。毎日走った機会をカードに残し、目標タイムと、毎週のベストタイムを記録カードに記録することで、めめてを頑張って主体的に運動に取り組む姿が見られた。	・マラソンに関しては、今年度は児童の皆さんの登校が早く時間に元気に遊ぶ声が聞こえることホッとします。
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	2:60%以上の児童が学校評価で「めめてを頑張って運動した」と肯定的に回答した。	4	③「1校1取組」である長編は、児童自らが目標や練習計画を主体的に立て取り組む姿が、低学年から見られた。また、2月に実施した「朝マラソン」は、始業前の15分間、児童一人一人が、自らの目標回数を決め、主体的に取り組んだ。	・児童一人一人に目標をもたせ、その目標をクリアさせようとする学校の姿勢は、児童のやる気、自信を育てると感じます。
		マラソントイム・マラソン大会等とおし、めめてを頑張って主体的に運動に取り組む姿を育てる。	4:80%以上の子どもがめめてを達成した。 3:70%以上の子どもがめめてを達成した。 2:60%以上の子どもがめめてを達成した。 1:60%未満の子どもがめめてを達成した。	3	1:60%未満の児童が学校評価で「めめてを頑張って運動した」と肯定的に回答した。	4	④児童自身が、目標や練習計画、練習方法を考え、生涯にわたり主体的に運動に親しむ取組の意義を、まず、教師が十分に共通理解し、児童への励ましや助言、時には共に運動を楽しむなどの指導を行った。その結果、昨年度以上に「朝マラソン」に積極的に参加する児童の数が増加した。	・子どもたちが、明るく元気に登校するために朝食をしっかりとすることは大切なことは家庭は、さらに理解してほしいと願います。
プラン5 魅力ある教育環境づくり	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良質な教育環境をつくり出す。	授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	4:80%以上の児童が学校評価で「先生は、分かりやすく授業を教えてくれる」と回答した。	4	①各教員が、毎回の学校公開の授業評価結果を授業改善の参考とした。また、全学級の傾向を学力向上担当教師が集計し、全校的な授業改善の参考とした。	・児童アンケートにある「学校に来ると楽しいことがある」「入四小が好き」と肯定的に回答している児童が90%以上と、とても良い結果だと思います。
		授業改善セミナー等の研修成果を生かし、主任教諭が助言・支援を行う校内研修等を実施しOJTを充実させる。	4:学期に2〜3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	3:70%以上の児童が学校評価で「先生は、分かりやすく授業を教えてくれる」と回答した。	4	②OJTとして、主任教諭が、授業改善セミナー等の研修結果を職員会議等を利用し、全教職員にレクチャーした。また、各主任教諭が、学習指導、児童理解、校務分掌等において、対象となる若手教員に対し、具体的なミッションをもち、指導・育成に取り組んだ。	・児童アンケートの「授業は楽しい」「授業で分らないことがよくある(=ない)などで、良い結果が出ています。また、教員の同僚性を伸長するため、各教員の優れた教育実践を校長が、「授業力向上通信」として全教員に紹介し、共有した。
		各種研究発表会等の研究・研修の成果を、自身の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	2:60%以上の児童が学校評価で「先生は、分かりやすく授業を教えてくれる」と回答した。	4	③本校児童の実態に即した指導法として、校内研究で「教えて考えさせる授業」(東京大学大学院教授市川伸一先生)に取組んだ。教員の授業実践に対し、市川先生からも高い評価を頂くとともに、各学力調査の結果から児童の学力が、飛躍的に向上したことが認められる。	・現場の先生方が一生懸命児童と向き合っている姿を見つけて安心しています。
		校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。	4:月1回以上行った。 3:学期に2〜3回行った。 2:学期1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	1:60%未満の児童が学校評価で「先生は、分かりやすく授業を教えてくれる」と回答した。	4	④本校児童の実態に即した指導法として、校内研究で「教えて考えさせる授業」(東京大学大学院教授市川伸一先生)に取組んだ。教員の授業実践に対し、市川先生からも高い評価を頂くとともに、各学力調査の結果から児童の学力が、飛躍的に向上したことが認められる。	・現場の先生方が一生懸命児童と向き合っている姿を見つけて安心しています。
プラン6 学校・家庭・地域が担う役割などを明確にし、地域に開かれた教育の実現を目指す。	教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	地域教育連絡協議会において、児童・生徒の発着等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2〜3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	4:80%以上の児童が学校評価で「家庭で計画的に進んで学習した」と肯定的に回答した。	4	①ホームページへの掲載を確実に進めた。さらに、校長通信、学校だより、学年だより、保健だより、給食だより、スクールカウンセラー・通信など積極的な文書での発信にも努めた。また、連絡メールなども活用し、確実な情報伝達にも留意した。	・本校独自学校評価の教職員アンケートでは、保護者対応や地域に関して、他の項目に比べて目標達成度が低いとの説明だが、人と人の関係は双方から見る視点が必要と考える。なぜ信頼関係が築けていないのかについて、謙虚な柔軟な姿勢が必要と考える。
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実施する。	4:学期に2〜3回行った。 3:学期1回以上行った。 2:年1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	2:60%以上の児童が学校評価で「家庭で計画的に進んで学習した」と肯定的に回答した。	4	②今年度も学校支援地域本部の強力な協力により、学校がめざす「じぶんについていいな」ともだちについていいな「がいばい」の学校づくりに大いに協力をいただいた。	・朝のあいさつが今年度さらに素直になりました。立ち止まって、しっかりと相手を見てあいさつする入四小の子どもたち、あいさつをみんなしっかりしてくれるのは、嬉しいですね。
		毎学期の期末テスト前の家庭学習の取組みなどをとおし、主体的・計画的に家庭学習に取り組む態度を培う。	4:80%以上の子どもが、自身の目標点数を上回った。 3:70%以上の子どもが、自身の目標点数を上回った。 2:60%以上の子どもが、自身の目標点数を上回った。 1:60%未満の子どもが、自身の目標点数を上回った。	3	1:60%未満の児童が学校評価で「家庭で計画的に進んで学習した」と肯定的に回答した。	4	③本校独自の「期末テスト」は、児童にとって、自ら1週間の学習計画を立案・実行する家庭学習を通して、「自分の努力が形になる」「よい点を取ると気持ちがいい」「勉強の目標になる」など学びに向かう姿を育む学習機会となっている。目標設定の仕方が、著しく高い児童や著しく低い児童が散見される。適切な目標設定ができるメタ認知力を育む必要がある。	・学校だより、校長通信「アンの花束」も毎回しっかりと読ませていただいております。
		すべての教員が、「主体的・対話的で深い学び」を実現する「教えて考えさせる授業」実践に取組み、児童の学力向上を図る。	4:算数科全単元において研究・実践に取り組んだ。 3:算数科90%の単元において研究・実践に取り組んだ。 2:算数科60%の単元において研究・実践に取り組んだ。 1:算数科60%未満の単元において研究・実践に取り組んだ。	3		4		

- 「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。
- 記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。
- 学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である B:自己評価はおおむね適切である C:自己評価は適切ではない D:評価は不可能である の4点について、評価した人数を記載する。